

温泉地における不易流行を考える

公益財団法人日本交通公社 観光政策研究部 主席研究員 吉澤 清良

「温泉まちづくり」という言葉をご存じだろうか。

「温泉まちづくり」とは、当財団が二〇〇八年（平成二十年）四月に生み出した造語で、「温泉地におけるまちづくり」の意味で用いている。

この年、当財団では、温泉地が抱える共通の課題について解決の方向性を探り、各地の温泉地の活性化に資することを旨とし、その名も「温泉まちづくり研究会」を立ち上げた（表1 42ページ参照）。現在、七つの温泉地（北海道阿寒湖温泉、群馬県草津温泉、三重県鳥羽温泉郷、兵庫県有馬温泉、愛媛県道後温泉、大分県由布院温泉、熊本県黒川温泉）を会員とし、当財団が自主事業の一環で運営しているネットワーク型の研究会である。

同研究会では、会員温泉地の関係者や行政担当者、有識者などが集まり自由闊達に議論し、得られた情報や知見は、「提言」などとして取りまとめ、研究会ホームページなどを通じて全国に広く発信している。本特集「温泉地における不易流行を考える」には、同研究会の関

者からご寄稿いただいた。研究会代表の大西雅之氏、同副代表の金井啓修氏、桑野和泉氏には、「まちづくりへの想い」を、各温泉地で活躍のキーパーソン（大川富雄氏、湯本晃久氏、奥野和宏氏、岩田一紀氏、宮崎光彦氏、生野敬嗣氏、北里有紀氏）には、「現場からの声」をお聞かせいただいた。

また、温泉地研究の第一人者で、研究会のアドバイザーを務めていただいている下村彰男氏、内田彩氏からは、「温泉地再生の方策」について、ご提言いただいた。

ここでは、我が国の温泉地の現状を概観し、ご寄稿内容を基に温泉地、温泉旅館の「本質」について考え、今後の温泉地、温泉旅館のあり方について考察する。

日本の温泉地の概要

増加する温泉地数と、減少する宿泊利用人員

日本列島は環太平洋火山帯に位置し、各地で温泉が湧出、特に北海道・東北・関東・中部・九州地方に

は温泉地が数多く分布している。

環境省「温泉利用状況」によると、温泉地数は二〇一二年（平成二十四年度）現在で三千八十五カ所、二〇〇〇年代に入り頭打ちの状態ではあるが、一九八〇年代後半から一九九〇年代にかけては、温泉掘削技術の進歩により温泉開発が容易になったこと、また「ふるさと創生事業」（注1）の影響などにより、温泉地数の増加は著しい。非火山地域で温泉の少ない近畿・中国・四国地方などでも数を増やしている。

宿泊利用人員は、高度経済成長期に大きな伸びを見せたが、経済成長率の鈍化とともに減少に転じた。一九八〇年代半ばより再び増加し始め、一九九二年（平成四年）に過去最高（二億四千三百二十五万人）を記録したが、その後は景気の低迷とともに減少傾向にある。

温泉利用の歴史的転換点

内田彩氏（特集6）が注目した江戸時代後期の「湯治」以降、我が国では、温泉利用の転換点が三度あったと言われている。

図1 温泉まちづくり研究会の構成

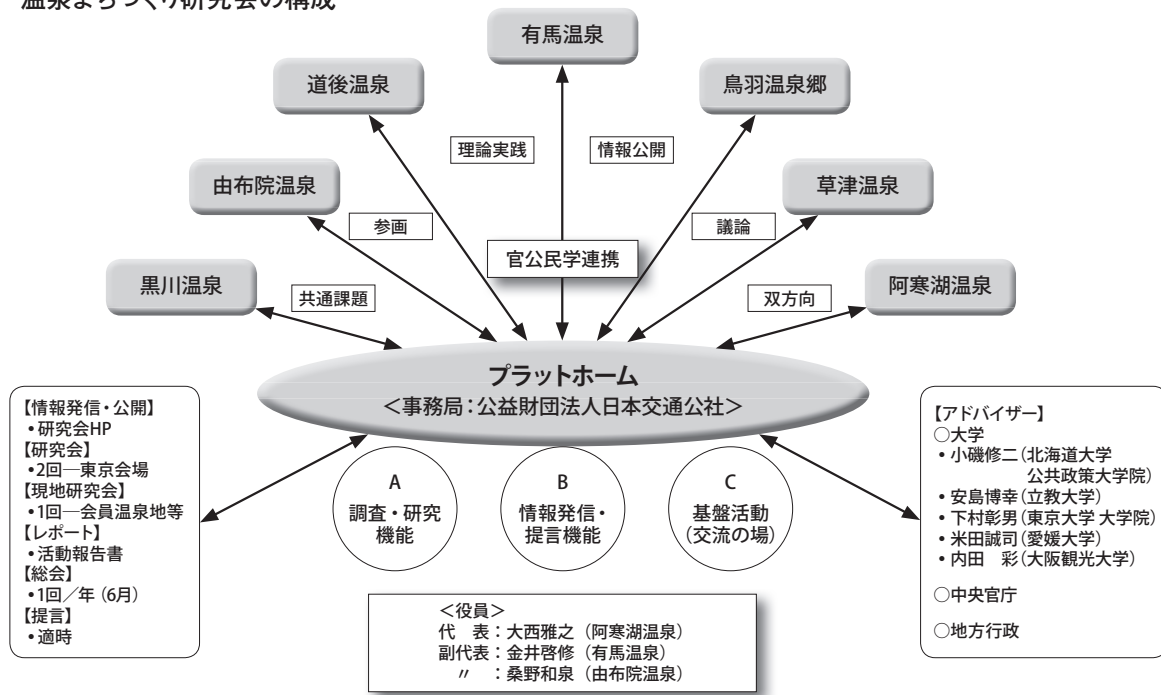
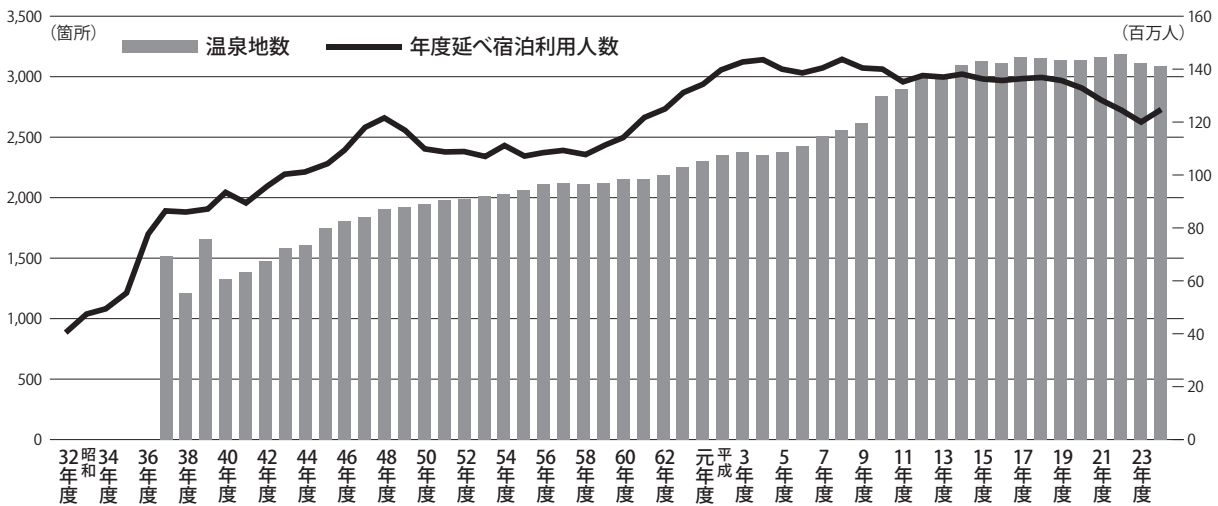


図2 温泉地数と年度延べ宿泊利用人数



資料：環境省「温泉地利用状況」

最初の転換点は、明治から大正にかけての保養・休養目的での温泉利用である。皇族の温泉地（伊香保、那須、箱根宮ノ下など）での滞在は、温泉地を上流社会向けの温泉保養地へと変容させた。同時期の外国人による国内旅行の自由化は、雲仙や別府といった国際的な温泉保養地の形成を促した。さらに大正から昭和初期にかけて、大都市近郊の温泉地は、国内経済の成長に伴い、都市住民の保養や慰安の場としての性格を備えるようになっていった。

第二の転換点は、高度経済成長期から一九七〇年代にかけての旅行の大衆化、慰安や観光目的での旅行が増加した時期である。企業の職場旅行などの団体旅行、一泊二食宴会型の旅行が主流となり、温泉地は盛り場的な色合いを強めていく。宿泊施設では施設の大型化、料理の画一化、飲食・物販機能の強化（宿泊客の囲い込み）などが進んでいった。

第三の転換点は、特にバブル経済の崩壊以降に起こった、消費者ニーズや旅行形態の変化による保養・療養機能の見直しである。「健康と温

視座

特集テーマからの

「泉」が注目を集め、テレビや雑誌の温泉特集をきっかけに女性の間で「温泉ブーム」が生まれると、温泉地のマーケットは男性から女性にシフトしていくことになる。

しかし、男性の利用が中心であった歓楽型温泉地の多くは、魅力のない温泉として客離れが進行し、苦境に直面することになった。

不動の人気とは裏腹に、低迷を続ける温泉地

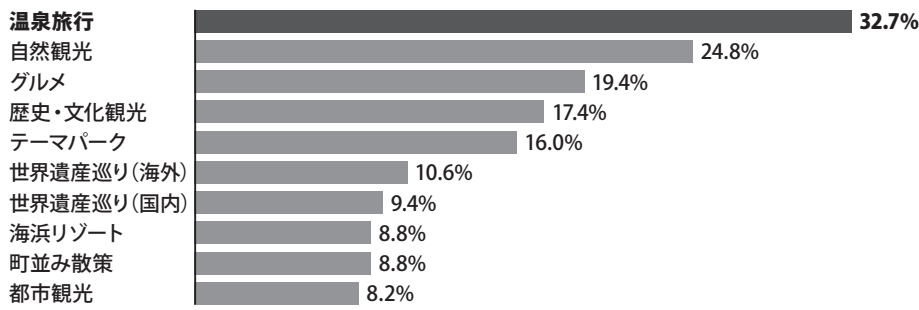
バブル経済の崩壊以降、全国の温泉地では、温泉情緒や地域性が意識されるようになり、旅館では客室の改装や接客などサービスの見直し、また、温泉街でも景観整備や賑わいづくりなど、さまざまな動きが見られるようになった。

当財団の『旅行者動向2013』によれば、「行ってみたい旅行タイプ」(複数回答)において、一位は「温泉旅行(三二・七%)」で、二位の「自然観光(二四・八%)」に大差をつけてい

る。温泉旅行は、調査開始(二〇〇〇年)以来、二〇〇九年を除いてトップの座にある。

しかし、温泉地の現場から「景気」のよい話、は、あまり聞こえてこない。温泉は日本人の旅行で不動の人

図3 行ってみたい旅行タイプ(複数回答)



資料: (公財) 日本交通公社「旅行者動向2013」

気を誇っているにもかかわらず、温泉地の多くが低迷を続けている。

消費者ニーズや旅行形態の変化への対応が遅れたこと、不十分であったことが、低迷の原因と言われているが、ここでは、温泉地や温泉旅館そのものの存在、その意味について、改めて考えてみることにしたい。

温泉地、温泉旅館の本質に迫る

本特集では、我が国でも有数の旅館の経営者、地域づくりの実践者、また有識者の方々が、低迷からの脱却、そのためのヒントを数多く示唆している。各稿を振り返り、温泉地、温泉旅館の本質を考える。

地域のリーダーが語る まちづくりへの想い

阿寒湖温泉の大西氏は、「旅館経営とまちづくりの関係を考える」(特集1)の中で、「地域の成長があつて初めて個々の企業の発展も見込める」として、「豊かな自然とアイヌ文化という他にない個性を磨き上げ、郷



大西雅之氏

土力を高め、何世代にもわたって持続する。二〇〇年ブランドの旅館、そして「地域の礎」を創り上げていきたい」との想いをつづっている。

不易は自然やアイヌ文化であり、流行を支えるのは、ダーウィンの「進化論」を例に挙げて語った「変わり続ける決意」であった。

個(旅館)の経営に公益の視点を持つ、公(まちづくり)の活動に収益の視点を持つ、それらが融合する形でのまちづくりの重要性を学ばせていただいた。

有馬温泉の金井氏は、「たゆまぬチャレンジの根底にあるまちづくりの精神」(特集2)の中に、有馬温

泉が過去幾度となく災害に遭いながらも、そのたびに復興してきた理由として、「その（復興）経験や何とか立ち直ろうという大事な意識が世代を超えて継承されているからこそできる。それがこの町に流れているDNAかもしれない」と記している。

不易はDNAであり、矢継ぎ早に生まれる取り組み、流行の源は知的好奇心、探究心、自由な発想であった。



金井啓修氏



桑野和泉氏

由布院温泉の桑野氏は、「百年の計、変わらぬ思いと進化する由布院」（特集3）の中で、一九二四年（大正十三年）、本多静六氏の『由布院温泉発展策』を抛り所に、滞在型保養温泉地を目指して、「静けさ」「緑」「空間」を大事にしたまちづくりを行ってきたと記し、「ワクワクする時間や興奮のエネルギーが渦巻く時間、人々が出会う機会がある町でありたい」との願いを語った。

不易は「静けさ」「緑」「空間」であり、流行は今まさに具体化しようとしている魅力的な空間の創造なのであろう。

今ではよく使われる「住んでよし、訪れてよし」の考え方は、由布院温泉

にその原点を見いだすことができるが、桑野氏には、この言葉の真意を自分自身の言葉で語れる強さがある。

温泉地のキーパーソンに聞く 現場からの声

各地域でご活躍のキーパーソンが語った「温泉地からの声」（特集4）では、次のようなことに注目した。

●阿寒湖温泉 大川富雄氏

阿寒の自然を多くの人が楽しめるように、自然を守りながらもいかに活用していくかが、今後の観光振興のポイントとなる。

●草津温泉 湯本晃久氏

温泉、温泉情緒、文化を守り続けていくこと、また一方では、より魅力的な温泉地づくりに向けた変化を恐れないことが大切である。

●鳥羽温泉郷 奥野和宏氏

鳥羽らしさを常に念頭に置きながら、「見えない価値」を時代に呼応した形で、見える化する（表現する）、価値創造することが重要である。

●有馬温泉 岩田一紀氏

有馬らしさは、訪れる誰をも受け入れてきた温泉地が持つ懐の深さ、何とも言えない心地よさ、空気感、そこに住む人々の優しさである。

●道後温泉 宮崎光彦氏

温泉の恵みと歴史文化の豊かさを生かし財産として継承していく覚悟、地域への愛情、不屈の行動力と住民の結束力、そして誇りが大切である。

●由布院温泉 生野敬嗣氏

持続可能な地域であるために、変化する現実を受け止め、「由布院スピリッツ」を胸に、真摯に向き合っていくことが必要である。

●黒川温泉 北里有紀氏

「黒川温泉一旅館」の理念の下、黒川温泉の姿を描き、共感してくださる方を巻き込み、地域の存続方法を模索していくことは、挑戦であり、使命である。

それぞれのキーパーソンが感じている不易は、「自然」「歴史文化」「温

視座

特集テーマからの

泉「温泉文化」「温泉情緒」ばかりではなく、温泉地特有の空気感、「人柄」や「モノの見方や考え方」「精神性」にまで及んでいる。そして、流行は、覚悟を持って取り組む、魅力的な温泉まちづくりに他ならない。

温泉地研究の第一人者が語る 温泉地再生の処方箋

東京大学大学院の下村氏は、「異界としての温泉地づくり」(特集5)の中で、寛げる温泉地の空間的秩序の回復が、温泉地をより優れた癒やしの場とするために必要な課題であると指摘している。

そして、「各地の温泉地がそれぞれ温泉らしさを有して差別化されること」の重要性、「住民、観光客の両者を視野に入れ、温泉地の自然や歴史、生活文化を象徴する資源を保全・活用し、交流型・自立型のまちづくりを進めていく」ことの必要性などを提言している。

大阪観光大学の内田氏は、「湯治文化を生かした温泉地づくり」(特集6)の中で、「交流の懸け橋となる人々、交流できる場により滞在生活が豊かになる、そこには、温泉地滞在における交流の本質が存在していた」と記した。

そして、「今後の温泉地では、変わることにない温泉の本質と各地域の個性・歴史を学び、温泉街全体で価値を共有し、時代に応じた新たな魅力を生み出していくことが求められる」と説いている。

今後の温泉まちづくりに向けて

我が国の温泉地の再生に向けて、今後の温泉まちづくりに取り組む姿勢、あり方を考察する。

まず地域があつて、 地域とともに生きる

「観光まちづくり」という言葉が広まり、「個の旅館の魅力だけでは人を呼べない。自分たちのまちを魅力的にしていかなないと」と、今や多

くの旅館の方が信じて実践している。しかし、旅館と地域は単なる利益共同体的な関係ではなく、旅館はもっと深く地域と関わっている。山中温泉観光協会会長で、かよ亭亭主の上口昌徳氏は、温泉まちづくり研究会(以下、研究会)の場

で、「旅館は地域とともに生きていく。地域に生かされている」とお話しになったことがある。

「まず地域があつて、地域とともに生きる」という考え方を大事にしたい。

地域で共有できる分かりやすい ビジョンや言葉を大切に

『阿寒湖温泉・創生計画2020』や『有馬温泉まちづくり基本計画』『由布院温泉発展策』『黒川温泉一旅館』のように、住民の誰もが共有できる分かりやすいビジョンや言葉の存在は重要である。

観光カリスマ(注2)で、前草津町長の中澤敬氏も、研究会で、「草津には素晴らしい町民憲章『歩み入る者にやすらぎを、去りゆく人にしあわせ』がある。草津では町民憲章

を核に合意形成を図る」と話されていた。

地域の歴史や過去の取り組みの中に、地域の本来的な価値を見いだし、それらを基調としたビジョンや言葉を持つことは大切である。

風景の意味を知り、 価値を生かす

下村氏は、温泉地整備に関わる言葉の概念の中で、「景観」「風景」「空間」を取り上げて、「現状では『景観』的側面に関しては理解が進んできているものの、『風景』『空間』の側面に関しては、その意義や重要性が必ずしも十分に認識されているとは言い難い」と指摘し、そのため「異界性」の演出が十分ではないとの考えを述べられている。

由布院温泉「亀の井別荘」の中谷健太郎氏も、常々、「景観と言っていると分かりにくいから、風景と言おうよ」とおっしゃっている。

自分の地域を取り巻く風景、それは時間をかけた人の労力の積み重ねであり、その意味を知り、価値を生かしていくことは重要である。

温泉文化を生み出す、
温泉地の「サロン性」を見直す

内田氏(特集6)は、温泉地における交流に着目し、『交流文化09』(立教大学観光学部、二〇〇九年七月二十五日)においても、江戸時代の湯治場は「文化サロン」であったと書かれている。

前述の上口氏も、「温泉地が持っている力とは、人を呼び寄せ、その人たちが交流することで新しいモノが生まれることであり、そここそが温泉文化である」と言及している。温泉地の原点に返り、「サロン性」を見直し、温泉まちづくりに取り組んでいくことが肝要である。

郷土力を生かすには、まずリスベクトする気持ちは大切である

地域固有の文化、大西氏のおっしゃる「郷土力」を観光の場で生かすには、観光に使えるからといった安易な発想ではなく、有形無形の文化そのもの、また、その担い手などをリスベクトする気持ちは持ちたい。大西氏は、アイヌ文化を取り上げ、観光に活用していく際に、アイ

ヌ文化の根底にある、その意味や価値を理解して、そこに宿る精神を伝えていくことを重視している。

ブランドエクステンションで、
新しい価値を創る

草津温泉の先人たちが変化を恐れずに革新を続けてきたように「古さ」の中に「新しいもの」を付加していく発想も必要である。

前述の中澤氏も、研究会で、「温泉」という基本は変えず、温泉と無関係なものを組み合わせていく、ブランドエクステンションの考え方は重要である」と語っている。

常に挑み続けていく姿勢は、大西氏、金井氏、桑野氏、また、最古にして最先端の温泉まちづくりに取り組む宮崎氏をはじめ、研究会の方々に共通する特徴となっている。

ブランドを進化・深化させていくことが、結果的にブランド力を高めることにつながっていく。

自らの想いを伝え、
魅力の「芽」を創る

「消費者ニーズがどこにあるのか?」

多くの温泉地が市場調査を実施し、提供するモノやサービスについて、ヒットの「芽」を探し出そうと躍起だが、「出尽くし感」を抱き始めている関係者も少なくない。

前述の上口氏や中谷氏は、研究会で、「なぜ宿屋をやっているのか」と問われて、「自分が表現したいもの、思っていること、旅館を通して伝えたいことがある。そうして、想いに共感したお客様が来てくださる。宿屋は素晴らしい商売だ」と、異口同音に語られた。

温泉地においても、マーケティング



温泉まちづくり研究会の様子

で言う「プロダクト・アウト」、すなわち、自分が旅館を経営している考え(コンセプト)や心(マインド)を世に問う「コンセプト・アウト」、あるいは「マインド・アウト」の発想が大事ではないかと考える。

持続可能な 温泉地、温泉旅館である ために

立教大学の安島氏は、「温泉地の不易流行」(巻頭言)の中で、「不易」なものを見極め、それを基点に、成体験に惑わされずに『流行』を常に創り出す革新を継続していくことが温泉地経営には求められている」と書かれている。

「不易流行」の言葉を作り出した松尾芭蕉は、「たとえ元禄の華やかな流行に乗った俳句をつくったとしても、その俳句が後世になっても残り、不易の真実の中に、発展的解消をするようなものでなければならぬ」と、一貫して不易を重んじたという。消費者の旅行に求める価値が時代とともに変化していく中で、温泉

視座

特集テーマからの

地、温泉旅館が持続的に発展していくためには、常に時代の変化に感覚を研ぎ澄ませ、時代を超えて変わらない価値のあるものを踏まえつつ、温泉まちづくりを実践していくことが大切である。

(よしざわ きよよし)

〔注1〕「自ら考え自ら行う地域づくり事業」通称、ふるさと創生事業とは、一九八八年（昭和六十三年）から一九八九年（平成元年）にかけて、各市区町村に対し地域振興に使える資金一億円を交付した政策。「ふるさと創生二億円事業」とも言われる。

〔注2〕日本の地域観光振興を目的に、特色のある観光地づくりに貢献した人々を、「観光光カリスマ百選」選定委員会¹が選定した。国から「自立した観光地づくり、全町民参加による「共生」の観光地づくりを進めた中澤敬氏は、「自立と共生のカリスマ」と称されている。

〔参考文献〕

- ・財団法人日本交通公社（当時）編著『観光読本（第二版）』（東洋経済新報社、二〇〇四年）
- ・『山形大学紀要（社会科学）第38巻第2号』「温泉地の旅館経営における二つの方向性―資本力と（おもてなし）の複合因果に関する計量分析―」（金井雅之（地域教育文化学部））
- ・『温泉まちづくりの課題と解決策』（温泉まちづくり研究会、二〇一一年五月）
- ・『温泉まちづくり研究会データベース記録』（温泉まちづくり研究会、二〇一一年〜二〇一三年度）
- ・童門冬二『なぜ一流ほど歴史を学ぶのか』（青春出版社、二〇一四年七月十五日）

表1 温泉まちづくり研究会の概要

設立	2008年4月		
目的	本研究会は、人口減少社会、少子高齢社会を迎えた我が国において、成熟化・国際化に対応する新しい温泉まちづくりのあり方に関する先駆的、実践的な研究と提言、さらには具体化に向けた行動と情報発信を行う。また、会員相互並びに関連省庁、関連組織と連携しつつ、我が国の温泉地におけるまちづくりの展開促進を図ることを目的とする。		
事業	上記の目的を達成するため次の事業を行う。 (1) 定例研究会、シンポジウム等の開催 (2) 温泉まちづくりに関する調査及び研究 (3) 提言集その他刊行物の発行 (4) その他、本会の目的を達成するために必要な事業		
会員	北海道釧路市 阿寒湖温泉／群馬県草津町 草津温泉／三重県鳥羽市 鳥羽温泉郷／兵庫県神戸市 有馬温泉／愛媛県松山市 道後温泉／大分県由布市 由布院温泉／熊本県南小国町 黒川温泉		
体制	代表 副代表 〃 幹事 〃 〃 監事	大西 雅之 金井 啓修 〃 桑野 和泉 〃 黒岩 裕喜男 〃 大木 正治 〃 下城 誉裕 吉川 勝也	NPO法人阿寒観光協会まちづくり推進機構 理事長 有馬温泉旅館協同組合 専務理事／（一社）有馬温泉観光協会 副会長 （一社）由布院温泉観光協会 協会長 草津温泉旅館協同組合 理事長／草津温泉観光協会 副会長 道後温泉旅館協同組合 理事長 黒川温泉観光旅館協同組合 代表理事 鳥羽市温泉振興会 会長／鳥羽市観光協会 会長
	【事務局】 事務局長 事務局次長 事務局員 〃	梅川 智也 吉澤 清良 福永 香織 後藤 健太郎	（公財）日本交通公社 理事・観光政策研究部長 〃 観光政策研究部 主席研究員 〃 〃 研究員 〃 〃 研究員
	【研究アドバイザー】 小磯 修二 安島 博幸 下村 彰男 米田 誠司 内田 彩	北海道大学公共政策大学院 特任教授 立教大学 観光学部 教授 東京大学大学院 農学生命科学研究科 教授 愛媛大学 法文学部 総合政策学科 講師 大阪観光大学 観光学部 専任講師	
活動概要・研究テーマ	<p>■第1ステージ（2008～2010年度）の研究テーマ</p> <ol style="list-style-type: none"> ① 安定的な観光まちづくり財源 ② 指定管理者と観光まちづくり組織 ③ 歩いて楽しめる温泉地～カーフリーリゾート ④ 電線・電柱の地中化 ⑤ 社会基盤整備と都市計画的な事業手法の導入 ⑥ 食の魅力づくり ⑦ 温泉地における環境経営 ⑧ 顧客満足度調査（CS調査）による温泉地比較 <p>研究会の様子、議論内容は、同研究会ホームページで公開しています。 (http://onmachi.jp/) 第1ステージに基づく提言書、第2ステージ以降では、各年度のディスカッション記録をご覧いただけます。</p> <p>■第2ステージ（2011・2012年度）の研究テーマ</p> <ol style="list-style-type: none"> ① 震災以降の消費者の価値観変化への対応 ② 温泉地・旅館の長期滞在への対応 ③ 場としての旅館、行為としての旅館、表現としての旅館（栃木県那須塩原市板室温泉にて） ④ “第2次おひとりさまブーム”に、温泉地・旅館はどう対応するか ⑤ 温泉を離れて考える、温泉地の観光的魅力 ⑥ ビッグなお二人から学ぶ 温泉地・温泉旅館の過去・現在・未来（大分県由布市由布院温泉にて） <p>■第3ステージ（2013年度～）の研究テーマ</p> <ol style="list-style-type: none"> ① 入湯税その後～観光まちづくり財源として ② 温泉街の景観とまちづくりを考える～「湯畑」周辺と街なみ景観の整備（草津町草津温泉にて） ③ 温泉地での「滞在プログラム」を考える ④ 海外の温泉地、リゾートに学ぶ 		